



機能主義的翻訳理論の諸相ーグローバル時代におけるスコポス理論の展開と応用ー

藤濤, 文子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2008-11-21

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3018

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003018>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	藤 濤 文 子
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博ろ第 3018 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位授与の 日 付	平成 20 年 11 月 21 日

【 学位論文題目 】

機能主義的翻訳理論の諸相－グローバル時代におけるスコボス理論の展開と応用－

審 査 委 員

主 査	教 授	林	博 司
	教 授	湯 淺	英 男
	教 授	遠 田	勝

論文要旨

氏 名 藤 濤 文 子

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

機能主義的翻訳理論の諸相

ーグローバル時代におけるスコ-pos理論の展開と応用ー

論文要旨

グローバル化する現代においては、異なる言語・文化間のコミュニケーションが量的に増え、それに伴い翻訳を取り巻く現実が多様化している。本論文では、翻訳の多様な現実を認めることから出発することが必要であること、そしてその翻訳の多様性を学問的に捉えるのに機能主義的翻訳理論が有効であることを様々な側面から検証したものである。そして訳文作成に影響を及ぼす要因を、言語差・文化差・コミュニケーション状況という3つの観点から捉えることを提案し、訳文の具体例分析によりそれらの要因がどのような制約となりうるか、またその制約にもかかわらずどれほど翻訳者の判断決定の余地が残されているかを明らかにした。さらに、翻訳行為を異文化間コミュニケーション行為の一形態として広く捉えることを提案した。

第2章においては、ライスとフェアメーアを中心として、翻訳研究の機能主義的アプロー

チを概説した。ライスは優勢な言語機能に基づいてテキストタイプを分類し、それにより翻訳に求められる要求が異なると主張した。唯一正しい翻訳がそれ自体として存在するのではなく、機能に応じて翻訳のあり方が変わるという翻訳観に道を開いたものであり、翻訳研究の歴史において極めて重要な意義をもつものとして位置づけた。さらに、徹底した訳文志向を打ち出したスコ-pos理論では、目標社会において翻訳テキストがどのような機能を果たすことが求められているかに注目し、翻訳の目的に即していることを重視する。翻訳をコミュニケーション行為として見る視点である。第3章では、固有名詞を例として翻訳の多様性を確認した。固有名詞は翻訳行為の枠外に位置づけられることさえあるが、そのような極端な領域であっても翻訳方法が多様であることを実証した。ある表現をどう訳すかはそれぞれの状況に応じて流動的に変わるものであり、固有名詞の翻訳例で観察されたこの多様性は、他の領域でも生じるうることと考えられる。第4章では、翻訳に影響を及ぼす言語差の要因について、名詞の数という文法的カテゴリーの影響を例として取り上げた。日本語から英語とドイツ語に翻訳されたとき、単複の区別の明示化がどのように起こるかを質的分析と量的調査により考察した。その結果、文法の差という義務的制約がある領域でも、翻訳者の解釈という主体的な関わりによる選択の余地がかなりの割合であることが実証できた。第5章では、翻訳に影響を及ぼす文化差の要因を考察した。訳者注の機能に着目し、同一原文から訳された二つの訳文を比較した。つまり、文化差を注により埋めるケースと、注以外の方法を用いたケースを比較するという方法により、文化差の扱いについても翻訳方法の多様性を確認できた。さらに第6章では、コミュニケーション状況が翻訳に与える影響について、映像翻訳を例にして、同一作品の字幕版と吹き替え版を比較して考察した。文字か音声かというコミュニケーション媒体の差が訳文の差として表れる例である。そして第7章では、機能主義的翻訳理論の応用面の試みとして、スコ-pos理論の原則に基づいた翻訳の評価方法を提案した。翻訳を異文化コミュニケーション行為と捉えると、それを成功させるために実行された個々の選択行為の結果は、必ずしも原文との対応関係があるものばかりではない。そのような個

々の翻訳事例を、翻訳の目的と結束性、および原文への忠実性という3項目から評価分析する方法を考案し、具体例分析に当てはめてその妥当性を検討した。

機能主義的アプローチの様々な側面について、個別のテーマと具体的な翻訳事例を挙げながら議論を展開し、言語の差や文化の差が翻訳行為に制約を加える条件として働くこと、そして媒体や読者などといったコミュニケーション状況を翻訳者がどう見定めるかが訳文作成に特定の要求を突きつけることが示せた。それと同時に、これらの条件がそれ自体として絶対的な拘束力をもつとは限らず、翻訳でその差をどのように埋め、制約条件にどのように対処するかの選択の幅があることもまた明らかになった。これらの束縛的条件と翻訳者の選択決定の自由により、原文への忠実さの表れ方が異なってくる。翻訳を取り巻く状況には複雑な制約的要素が絡み合っているが、影響を与える要因を分析的に見る方法を明らかにすると同時に、その制約的条件の中で翻訳者が主体的に判断する余地についても、機能主義的方法により学問的な記述が可能であることを主張した。

翻訳は二つの言語と文化の出会いから生まれる第三のものであり、場合によっては特定のイデオロギーにより操作されることもある。翻訳は何らかのフィルターを経たものであり、原文とは異なる別のテキストであることを知る必要がある。翻訳現象を読み解く作業の重要性と、それを理論的に支える機能主義的翻訳理論の有効性を実証した。

業績一覧

藤澤 文子

著書 1

『翻訳行為と異文化間コミュニケーションー機能主義的翻訳理論の諸相』
単著 松籟社 2007年12月 全174ページ

学術論文 20

- 1 「比喩表現の翻訳について」
単著 『ドイツ文学論集』36号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2007年11月 pp.31-53
- 2 「機能主義的翻訳理論の展開と応用」
単著 『ドイツ文学論攷』48号 阪神ドイツ文学会 2006年12月 pp.7-26 (レフェリー付)
- 3 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為ー『ノルウェイの森』の独語訳分析」
単著 『ドイツ文学論集』34号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2005年11月 pp.31-50
- 4 「翻訳における注のコミュニケーション機能についてー『キッチン』の独英語訳を例に」
単著 『ドイツ文学論集』33号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2004年11月 pp.27-38
- 5 「文学テキストの翻訳にみる異文化コミュニケーション行為ー評価分析のための方法一」
単著 『ドイツ文学』2-5 日本独文学会 2004年3月 pp.30-42 (レフェリー付)
第3回日本独文学会賞 (日本語論文部門)
- 6 「翻訳による日本文学受容についての一調査ーベルリンの図書館所蔵図書利用頻度調査一」
単著 『ドイツ文学論集』32号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2003年11月 pp.49-60
- 7 「固有名詞の翻訳方法についてーグリム童話の場合一」
単著 『ドイツ文学論集』31号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2002年11月 pp.19-32
- 8 「ことば遊び翻訳の機能主義的考察」
単著 『ドイツ文学論集』30号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2001年11月 pp. 61-84

9 「翻訳評価のためのコミュニケーション的分析」

単著 『ドイツ文学論集』29号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 2000年11月 pp.41-64

10 「視聴覚コミュニケーションと翻訳」

単著 『ドイツ文学論集』27号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 1998年11月 pp.61-78

11 「異文化コミュニケーションとしての映画翻訳 一字幕スーパーと吹き替えの比較を通して」

単著 『ドイツ文学論集』26号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 1997年11月 pp.75-97

12 「翻訳童話のテキスト成立事情 ―グリム童話を例に」

単著 『ドイツ文学』96号 日本独文学会 1996年3月 pp.75-85 (レフェリー付)

13 「翻訳のずれと異文化 ―『怨み』と『未練』の翻訳」

単著 『ドイツ文学論集』23号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 1994年11月 pp.69-82

14 「翻訳と異文化理解」

単著 『ドイツ文学論集』22号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 1993年11月 pp.119-134

15 「固有名詞、ジェスチャーおよび関係文の翻訳 ― M. Ende: "Die Geschichte von der Schlüssel und vom Löffel"の翻訳をめぐる」

単著 『ドイツ文学論集』21号 神戸大学ドイツ語教室 1992年10月 pp.63-97

16 「『誤訳』概念についての一考察 ―『誤訳』に見る異文化」

単著 『ドイツ文学論集』20号 神戸大学ドイツ語教室 1991年10月 pp.75-90

17 「戯曲翻訳の諸問題」

単著 『ドイツ文学論集』18号 神戸大学ドイツ語教室 1989年11月 pp.67-78

18 „Über die Subjektivität beim Übersetzen. —Mit Beispielen des deutsch-japanischen Übersetzens“

単著 『論集』43号 神戸大学教養部 1989年3月 pp.105-117

19 「ライプツィヒの翻訳学研究―等価問題を中心に」

単著 『研究報告』10号 ワイマル友の会 1985年5月 pp.156-170 (レフェリー付)

20 「ドイツに翻訳学―その歴史的背景と現状」

単著 『外国語・外国文学研究』8号 大阪外国語大学大学院修士会 1984年12月 pp.1-12

その他

(科研報告書)

「日本文学のドイツ語訳に見る異文化間コミュニケーション行為の事例研究」

単著 2004年5月 pp.1-63

(翻訳)

フェアメーア『翻訳とは文化の翻訳』

単著 『ドイツ文学論集』25号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 1996年11月 pp.57-78

ヨーゼフ.P. メルテス『養護教育の方法―図説 子どもの発達と障害』

共訳 (第6章全30頁担当) 同朋者出版 1983年12月

(口頭発表)

「翻訳と異文化理解」 阪神ドイツ文学会研究発表会 1992年11月

『マルチ・メディア翻訳』の特性と翻訳例 京都ドイツ語学研究会 1997年12月

(講演)

「翻訳行為と異文化間コミュニケーション」 DAAD友の会日独フォーラム 2008年3月

論文審査の結果の要旨

氏 名	藤 濤 文 子		
論文題目	機能主義的翻訳理論の諸相 ーグローバル時代におけるスコボス理論の展開と応用ー		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	林 博 司
	副 査	教授	湯 淺 英 男
	副 査	教授	遠 田 勝
	副 査		印
	副 査		印
要 旨			
【本論文の目的】 本論文の目的は、翻訳理論の発展と応用にある。翻訳理論は、言語の相互理解を促進し、異文化間のコミュニケーションを円滑にするための重要な役割を果たしている。本研究では、機能主義的翻訳理論の諸相を明らかにし、グローバル時代におけるその展開と応用を考察する。具体的には、スコボス理論の展開と応用を重点的に検討する。また、異文化間のコミュニケーションにおける翻訳の役割と重要性を論じる。最終的に、異文化間のコミュニケーションを促進するための効果的な翻訳方法を提言する。 【本論文の構成と内容】 本論文は、第1章から第8章まで構成されている。第1章は、翻訳理論の概論と機能主義的翻訳理論の基本的な考え方を述べている。第2章は、スコボス理論の展開と応用を考察している。第3章は、異文化間のコミュニケーションにおける翻訳の役割と重要性を論じている。第4章は、異文化間のコミュニケーションを促進するための効果的な翻訳方法を提言している。第5章は、異文化間のコミュニケーションにおける翻訳の役割と重要性を論じている。第6章は、異文化間のコミュニケーションを促進するための効果的な翻訳方法を提言している。第7章は、異文化間のコミュニケーションにおける翻訳の役割と重要性を論じている。第8章は、異文化間のコミュニケーションを促進するための効果的な翻訳方法を提言している。			

る。第3章は翻訳の多様性を固有名詞の具体例を用いて検証している。固有名詞という、音をそのまま再現するだけと考えられている領域でさえ翻訳方法が多様であることを、先行研究で提示されている翻訳手法の11分類の全てがこの領域においても観察されることを示すことによって検証している。続く三章は、第1章で述べられた翻訳に影響を与える三つの要因（言語の差、文化の差、コミュニケーション状況）の各々についての考察に当てられる。第4章は言語の差を扱い、村上春樹の『ノルウェイの森』の英語訳とドイツ語訳を例にとり、単数・複数という文法的カテゴリーが翻訳においてどのように処理されているかを分析している。数というカテゴリーが形態的に現れない（特に人以外の名詞）日本語を、数カテゴリーが義務的に形態として現れる英語とドイツ語に翻訳するとき、英語とドイツ語で単・複の区別の明示化がどのように起こるかを質的・量的に調査した結果、翻訳者が数を明示する訳語を選ぶのか、それとも別の方法により明示化が生じない訳語にするのかを選択できる余地が少なくとも三分の一以上の割合を占めることが分かったとしている。第5章は文化の差を扱う。文化差の処理方法として訳者注に着目し、吉本ばなな『キッチン』の英語訳とドイツ語訳を取り上げて分析を行っている。その結果、注には原文の概念や訳語の理解のために異言語文化の差を埋めるというコミュニケーションの断絶回復機能のみならず、翻訳者の意図により訳文がどのようなコミュニケーションを実現するかを方向づける機能、つまり新たなコミュニケーション創出機能がある、と主張し、注には何を異文化として目標言語文化に導入するかを翻訳者の判断と意図が現れると結論づけている。第6章はコミュニケーション状況が翻訳に与える影響についての議論である。ここでは材料として映像翻訳を用い、同一映画作品の字幕版と吹き替え版を比較する、という方法を採用している。まさにコミュニケーション媒体の差が目標テキストの差として現れる例で、起点テキストの分析によって訳文が決まるのではなく、翻訳者がコミュニケーション状況を適格に判断して初めて訳文が決まるのだと主張している。以上を踏まえて第7章では翻訳の評価方法がスコボス理論の原則に基づいて提案されている。第8章は本論文全体の総まとめである。

【本論文の独創性と意義】

本論文の意義は、まず第一に、ただ横のものを縦にする、或いは縦のものを横にするだけの創造性のかけるもない作業であるという、翻訳の一般的なイメージを徹底的に打ち砕いたことにある。第3章、4章、5章、6章での具体的作品の翻訳分析を通して、訳文は半ば自動的に決まるのではなく、多様な可能性の中から制約や状況に応じて翻訳者が最適と思うものを判断決定するものである、ということを明らかにした。しかも固有名詞、数カテゴリーという、一見翻訳者が介入し難く見える領域にも翻訳者の判断が最大限働いていることを示したことはこの主張に大きな支持を与えるものであると評価できる。

また、方法論として、上記四つの章と第7章で具体的な作品とその翻訳分析を行った際（第7章はヘッセの『車輪の下』）、英語やドイツ語の原文と日本語の二つの訳文、日本語原文と英語訳・ドイツ語訳を比較し、翻訳過程の相対化を図っていることは分析の客観性の確保という観点からやはり大いに評価される。

次に、本論文の独創性であるが、他の部分もさることながら、第7章に特に凝

縮されている。翻訳行為とは目的という変数に応じて変化する関数である、とするスコボス理論を背景に、次の三つのルールがたてられ、これらは階層を成しているとされる。(1) スコボスルール：翻訳の目的に合致していること、(2) 結束性ルール：目標テキストに結束性があり理解可能なこと、(3) 忠実性ルール：起点テキストと何らかの関係があること（忠実性は更に、内容、形式、効果の三つに分けられる）。これらは点数化され、各訳文テキストはこの点数に応じて評価されることになる。具体的な作品の分析においては、スコボスの決定や評価の点数決定のプロセスにやや不十分な点が見られるが、この訳文の評価方法は全く前例の無い独自のもので、本論文を他の追隨を許さない学術的価値の高いものにしてと評価できる。

なお、本論文に関わる参考論文の代表的なものとして、下記のものが発表されている。

1. 藤濤文子1996「翻訳童話のテキスト成立事情」『ドイツ文学』96、日本独文学会、PP.75-85
2. 藤濤文子2003「文学テキストの翻訳にみる異文化コミュニケーション行為—評価分析のための方法—」『ドイツ文学』2巻第5号、郁文堂、PP.30-42
3. 藤濤文子2005「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為—『ノルウェイの森』の独語訳分析」『ドイツ文学論集』34、神戸大学ドイツ文学論集刊行会、pp.31-50
4. 藤濤文子2006「機能主義的翻訳理論の展開と応用」『ドイツ文学論攷』48、阪神ドイツ文学会、PP.007-026
5. 藤濤文子2007「比喻表現の翻訳について」『ドイツ文学論集』36、神戸大学ドイツ文学論集刊行会、pp.31-53

上記論文のうち、第2番目の論文には、日本独文学会より「第3回日本独文学会賞（日本語論文部門）」が授与されている。

本論文は画期的な翻訳「理論」に関する本格的な論文であり、学術的な価値が高いのは勿論、他の翻訳研究者に対するインパクトは極めて大きいと考えられる。以上のことから、本審査委員会は全員一致で、学位申請者藤濤文子氏は博士（学術）の学位を得る資格があると認めた。